

令和 2 年 8 月 15 日

阿武山古墳にまつわる古代史を探る”

昭 35 年卒 山田 英二

§ 1. はじめに；

大阪府の北部、高槻市・阿武山（標高 281.1m）の頂上に近い山腹に京都大学阿武山地震観測所があり、約 30m の白亜の殿堂（塔）が聳えているが、その直ぐ北側に隣接して阿武山古墳がある。いずれも拙宅から徒歩約 5 分の所で、毎日の様に、その近辺の山道を愛犬ポチと散歩しているので、お隣さんと言ってよい親しい間柄である。

拙宅の町名は「大和 2 丁目」であるが、この町名がついたのは、阿武山の山麓（1 丁目、約 400 区画）と、中腹（2 丁目、約 100 区画）に大和団地（株）が宅地を造成したからである。大和 2 丁目の立地は、大和バス停から徒歩約 15 分、途中 156 段の階段があり、陸の孤島と言われて久しい。大和へ最初の入居は昭和 45 年に始まったが、拙宅は 68 坪の土地（約 400 万円）を購入して、故郷・飛騨高山・平湯出身の宮大工（中本富康さん）に、節の多いヒノキを使った家を建てて貰い、昭和 49 年に入居した。大和は最初の入居が始まってから今年で 50 周年を迎えるが、小生はここに住んで 46 年目である。

拙宅の直ぐ裏は京大用地で、46 年前は松林であったが、現在は、松の木は全て枯れて、地震観測所に通じる道路に到達するまでの山 10~20m はジャングルとなっている。

この阿武山は野生動物の宝庫で、リス、マムシ、シマ蛇、猪、兎、鹿、雉、山鳥、山鳩、鶯、カブト虫、クワガタ等が生息している。家の中をゲジゲジや 10cm 大のムカデが散歩している事があるが、ムカデに噛まれて激痛が走り鎮痛化の為に救急措置（点滴）を受けた事がある。春は地震観測所の桜が満開となり、ワラビ、タケノコ、フキが採れるし、秋は紅葉が美しく、栗拾いができ、自然には大変恵まれた素晴らしい山である。

§ 2. 京都大学阿武山地震観測所の歴史（高槻市奈佐原 944、標高 218m）；

京大阿武山地震観測所は、当時理学部の志田教授が中心となって、約 3 万坪の土地を地元から 300 年契約で借りて、原奨学金の援助で、通称「美人山」とも言われる阿武山山頂の近くに、昭和 5 年（1930 年）に着工し、昭和 8 年に完成した。山麓からの道路造成工事に始まり、3 年間という長い工期から考えて、難工事であった事が想像される。

世界第 1 級の地震観測所がこの地に建てられた理由は、昭和 2 年に発生したマグニチュード 7.3、犠牲者 3,000 人に及んだ奥丹後地震に端を発したという。

この山麓には活断層として有馬・高槻断層帯が通っており、観測の場所としてはうってつけの場所であった。観測所内には、機械式でドイツ製のウイーヘルト式地震計、ロシア製のガチリン式地震計、国産の佐々式大震計、アメリカ製プレス・ユーイング式地震計、及び最新式の電磁式地震計である小型満点地震計等が展示されており、定期的開催されている見学会に参加すれば、地震観測の歴史をたどる事が出来る。また、観測所屋上からの大阪平野の眺望が素晴らしく、晴れた日は望遠鏡で大阪城が見える。

その後、昭和 29 年には理学部附属教育実習施設となり、平成 2 年には改組により、京都大学防災研究所附属地震予知センター阿武山観測所となった。平成 23 年には歴代の地

震計を展示して、地震学の研究成果を伝える「サイエンス・ミュージアム構想」が始まった。平成 27 年には建物の耐震化が完了し、「サイエンスミュージアムプロジェクト」が本格化する事となった。地震観測所の見学会や講演会を支援する「阿武山サポーター会」というボランティア組織があり、小生も新米ながら所属している。

また、外勤的ボランティア活動組織として、「グリーンクラブ」があり、観測所周辺の里山の樹木の手入れ、下草刈り、見晴らし台の整備など、自然環境の保全を行っている。

§ 3. 阿武山古墳の発見（1934 年・昭和 9 年 4 月）；

京大地震観測所に隣接する地下に地震研究の為の恒温実験室を作る目的で掘削していたところ、偶然、地下式の古墳が発見された。丘頂から真下に掘削をはじめ、50cm ほど掘り下げた所で瓦礫を敷き詰めた層があり、更に石積みと漆喰が出土した。

京大考古学教室の浜田教授はチームを編成、調査した結果、横口式石槨とそれを覆う埴葺き古墳を発見した。この古墳は「墳丘」を持たない古墳で、外部には周溝と排水溝が設置されていた。墓室は盗掘を受けておらず、棺台に置かれた夾紵棺の棺内には保存状態の良好な五体が完全に揃い、7 世紀の古墳としては想像を絶するほど良い状態で残っていた。身長は 165cm、60 才前後と推定され、頭部付近は金糸に覆われ、大小 500 個あまりのガラス玉と銀線が残り、更に体部にかけられた布も形を留めていた。

「乾漆製の寝棺に金糸を纏う貴人」と新聞報道され、一般公開されるや 10 日間で 2 万人もの見学者が押しかける騒ぎになったという。

事態を重く見た内務省は、文部省、大阪府、志田教授を交えて協議し、「調査は冒涇である」として、外観調査のみ行って埋め戻しさせられた。

1982 年（昭和 57 年）埋め戻す前のエックス線写真の原版が地震観測所から見つかかり、分析の結果、被葬者は腰椎等を骨折する大けがをし、治療されて生きていたものの、寝たきり状態のまま二次的合併症で死亡した事、金糸の分布状態から、これが冠の刺しゅう糸であった事が判明した。しかも漆の棺に葬られていたことや、玉枕を敷いていたことなどを考えると、被葬者は最上位クラスの人物であったと考えられた。

これらの死因が鎌足の死因（落馬後に死去）と一致する事、この冠が当時の最高冠位である織冠であり、それを授けられた人物は、史上では百濟王子の余豊璋を除けば大織冠の鎌足しかいない事から、被葬者はほぼ『藤原鎌足』に違いないと報道された。

§ 4. 藤原鎌足（614～669 年）と中大兄皇子（626～671 年、カノオノミコ、後の天智天皇）；

鎌足は、元々は中臣氏の一族で初期の頃は中臣鎌子（ナトミカマ）と名乗った。その後中臣鎌足に改名した。そして臨終に際して天智天皇より大織冠と共に藤原姓を賜った。従って、生きていた頃の鎌足は『中臣鎌足』を用い、藤原氏の祖としては『藤原鎌足』を用いる。出生地は、「藤氏家伝」によると、飛鳥時代、奈良県橿原市となっている。

中臣氏は神事、祭祀をつかさどる家柄で、古くから朝廷に仕えていた。政治の中心であった蘇我氏や物部氏の様な名門ではなかったので、重職に就くのを憚った。

藤原氏が朝廷に於いて権力を握っていくのは、鎌足の子と 4 人の孫からである。

鎌足は早くから中国の史書に関心を持ち、儒教を学び、蘇我入鹿と共に秀才とされた。

『日本書紀』によると 644 年に中臣氏の家業であった祭官に就く事を求められたが固辞して摂津国三島の別邸に退いた。最初に「中臣鎌足」と「中大兄皇子」が出会ったのは、飛鳥寺の広場で蹴鞠中であったとされている。その後、専横を極めていた蘇我氏打倒の為、密かに中大兄皇子に接近し、蘇我氏討伐の計画を練った。

翌 645 年 6 月『乙巳の変』(イツシノヘ) に於いて、中臣鎌足と中大兄皇子によって蘇我氏は滅ぼされた。

§ 5. 蘇我一族の滅亡と大化の改新；

聖徳太子(厩戸王)の死後、豪族・蘇我氏の権力は天皇家を上回るほど強くなっていた。皇極天皇の時になると、聖徳太子の息子・山背大兄皇子(ヤマシロノオホノウジ)を攻め滅ぼし、蘇我蝦夷(ソガノエミ)の息子・蘇我入鹿(ソガノイロカ)が実権を握り専横を極めた。その様な中で、『中大兄皇子』は『中臣鎌足』と組んで 645 年 6 月、蘇我入鹿を倒し、蘇我蝦夷を自殺に追い込んだ。その後、中大兄皇子は孝徳天皇を即位させ、自ら実権を握ると共に、大化という年号を定めた。新政権は孝徳天皇、中大兄皇子(皇太子)を中心に、「内臣」の中臣鎌足、「左大臣」の阿部倉梯麻呂、「右大臣」の蘇我倉山田石川麻呂、「国博士」の僧旻と高向玄理らによって構成された。「内臣」の『中臣鎌足』は最高政治顧問の役割で、『藤氏家伝』には、「軍事・国政の重要事項は鎌足の判断に任せた」と書かれている。ここから本格的な律令国家の基礎となる古代政治史上の一大改革、即ち、天皇中心の中央集権国家の建設が始まった。『大化の改新』の始まりである。

§ 6. 大念寺と阿為神社(大阪府茨木市安威、鎌足ゆかりの寺社)；

大念寺は飛鳥時代(656 年)、鎌足の長男『定慧』を開山として創建された。大織冠廟堂と称し、安土桃山時代に浄土宗の念仏道場となって現在に至っている。平安時代の「阿弥陀如来立像」、奈良時代の「毘沙門天立像」などが安置されている。

場所は、阿武山古墳から阿武山を南方に下って行き(高槻市と茨木市の境界線を)山麓の安威川に出た直ぐ横にある。阿武山古墳の裏鬼門方面に徒歩約 1km の所である。

この地は中臣氏の一族、中臣藍連の所領であったから、その祖先を祀った「阿為神社」が「大念寺」の西隣りにある。社名も氏族名の藍から転化して「安威」とも「阿為」とも記した。この神社は中臣鎌足の先祖を祀った社と言う事になり、ここにも鎌足の足跡をみる事が出来る。双方とも藤原鎌足ゆかりの寺社として『上り藤の紋』が掲げられている。5 月 4 日の例祭では、お神輿が氏子の地区を回って、再び帰ってくる時に必ず大念寺山門へ挨拶に立ち寄る事になっており、関係の深さを物語っている。また、11 月 23 日には、鎌足を偲んで古装束を着た蹴鞠会が開催されている。

§ 7. 鎌足公古廟(大阪府茨木市安威)；

阿武山古墳の裏鬼門(南南西)約 2km の地点に、『鎌足』を祀る事を看板に掲げた大織冠神社(鎌足公古廟)がある。この神社には社殿がなく、文政 7 年(1824 年)に建立

された鳥居をくぐって石段を登りきると、鎌足公古廟と称する古墳時代後期(6世紀中頃)の横穴式石室を持つ円墳となっている。

鎌足公古廟、大念寺、阿武山の中腹にある稲荷神社、及び阿武山古墳の4つの史跡は、鎌足公古廟から阿武山古墳に向かって鬼門方向の一直線上にある。

また、驚くべき事に、この鎌足公古廟の南南東約49kmの地点に、中大兄皇子・中臣鎌足によって滅ぼされた蘇我入鹿の祖父・蘇我馬子の墓と言われる石舞台古墳がある。聖徳太子は子孫を皆殺しにされたことで怨霊となり、怨霊の力(鎌足が代行)で蘇我一族を祟り滅ぼしたという見方がある。御霊会が行われた神泉苑裏鬼門の南西に阿武山古墳が位置するのは、祟りに免疫性を有する鎌足の遺体によって、裏鬼門に集う怨霊を鎮める意味があったとの説がある。風水の方角論については無知蒙昧で理解が困難であるが、当時は重要な基準になっていたと考えられ、興味深い話しではある。

§ 8. 談山神社(奈良県桜井市)；

西暦645年5月、中大兄皇子と中臣鎌足は多武峰(トクミネ)の山中に登って『大化改新』の談合を行ったが、その縁で、後にこの山を「談い山」「談所ヶ森」と呼び、談山神社の社号の起こりとなった。即ち、鎌足の息子達が鎌足を祀る神社として678年に建立して談山神社と命名した。現存の塔は1532年に再建、高さは17mあり、世界唯一の木造13重の塔である。「多武峰縁起絵巻」には、鎌足が生まれた時に、白狐が鎌を持ってきて枕元に置いた為、その子を鎌子と名づけたと描かれている。この逸話にちなみ、談山神社では鎌を持った狐のお守りが売られている。

§ 9. 興福寺(奈良市登大路町、世界遺産、西国三十三か所・第9番)；

奈良の有名な観光スポットである興福寺の由来は、『中臣鎌足』が重病になった際、鎌足の妻・鏡大王が天智8年(669年)、釈迦三尊像を本尊として、現京都市山科区に創建した山階寺(ヤマシテラ)とされている。即ち、当初から藤原氏の為のお寺であったという歴史を持っている。山階寺は天武天皇元年(672年)に橿原市の「藤原京」に移され(厩坂寺)、更に奈良時代に平城京遷都に際し、奈良の春日の地に堂宇を建立し、国家の福を興すという意味を込めて「興福寺」と名づけた。

§ 10. 天智天皇(天皇に即位する前は中大兄皇子=中大兄と略記)；

天智天皇は父舒明天皇と、母皇極・斉明天皇の間に推古34年(626年)に生まれた。

当時は朝鮮三国抗争、唐の軍事介入等、東アジア情勢は激動の時代を迎え、倭国でも権力集中を進め、この難局にいかに対応していくかが課題となっていた。

中大兄は鎌足と共に645年に蘇我氏を討滅したが、当時20才の中大兄には即位する資格がなく母の弟が孝徳天皇として即位して初期の『大化改新』を進めた。

天智6年に近江大津宮への遷都を敢行、天智7年(668年)ついに天智天皇として即位する。朝鮮半島では高句麗が滅亡し、半島統一を企図する新羅が唐と戦争を始めた。この間、政治の中枢を担うようになっていた鎌足が天智8年に死去し、股肱の臣を失っ

た。天智 10 年、天智天皇は中央官制の中心となる太政官制を施行するが、この年 46 才で崩御してしまう。天智天皇崩御後、壬申の乱が勃発、近江朝廷は瓦解し、勝利を得た天智の弟・大海人が即位して天武天皇となり、律令国家建設は、この天武天皇、そして皇后で天智の娘でもある持統天皇によって成し遂げられる事となった。

天智天皇に関連する有名な和歌を 3 つあげる。

① 天智天皇の歌：藤原定家撰『小倉百人一首』に収載されている。

“秋の田の かりほの庵の とまをあらみ わが衣手は 露にぬれつつ”

② 皇后・倭姫王の歌：万葉集に天智天皇が病に倒れた時の歌として載っている。

“天の原 振りさけ見れば 大君の 御壽は長く 天足らしたり”

③ 額田王の歌：天智天皇と関係のあった万葉歌人・額田王が大海人と交わした歌。

“あかねさす 紫草野行き 標野(シノ) 行き 野守は見ずや 君が袖振る”

§ 1 1. おわりに；

大化改新は今から 1,300 年も昔の古代の出来事であり、史実には不確実な点も多いと考えられるが、藤原鎌足が大化改新の立役者であり、中大兄（天智天皇）を支えながら活躍し、藤原氏の祖として氏繁栄の基盤を築いたのは事実であろう。阿武山古墳の被葬者についても断定はできないにしても、鎌足である事はほぼ間違いないと考えられる。

本資料をまとめるに当たって、大和 1 丁目の下田健二様と、大和 2 丁目の元大阪薬大教授・木村捷二郎先生のご助言を頂いた事についてお礼申し上げます。下田様、木村先生ご両人とも古代史に興味を持たれ、調査された資料や、卒寿に当たって記録された古代史に関する筆記資料（卒論）を読ませて頂きました。

下田様は今年卒寿で、農林中央金庫を平成 7 年に定年退職された後（近年、腰の手術を受ける迄の間）約 20 年間、嵐の日以外は毎日の様に阿武山に登頂され、その登頂回数は 6,500 回以上に及ぶという千日回峰に匹敵する驚異的な記録を打ち立てておられます。また、カメラが趣味で「阿武山点描」という阿武山の自然の写真集を 2 冊自費出版しておられます。80 才の誕生日を記念して富士山に登ってご来光を拝んだ際、ブロッケン現象に遭遇したというのも奇遇で、山の神様がお祝いしてくれたと言えましょう。

鎌足公古廟→大念寺→阿為神社→阿武山の中腹にある稻荷神社→阿武山古墳の 5 つの史跡を現地調査するハイキング（3 時間コース）を近々実施したいと思っています。また、阿為神社の 5 月 4 日の例祭と、11 月 23 日の蹴鞠会も楽しみにしています。

【添付資料】①藤原家 系図、②大織冠と玉枕の写真、③阿武山古墳周辺地図

【引用・参考文献】

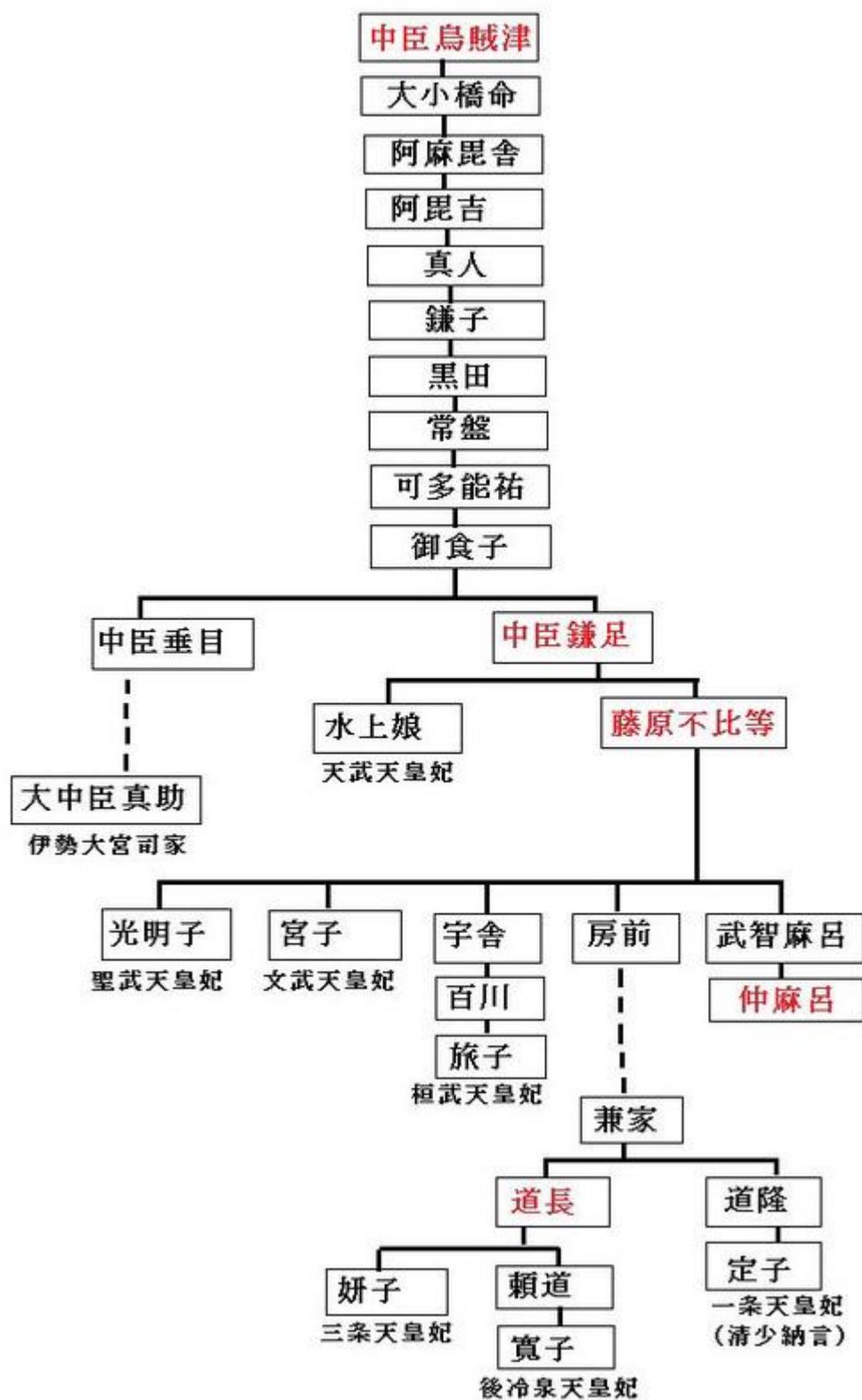
高槻市教育委員会編『藤原鎌足と阿武山古墳』吉川弘文館出版

杉本昌弘編集発行『近畿文化』第 838 号

森公章著『天智天皇』日本歴史学会編集、吉川弘文館出版

高槻市ホームページ『史跡阿武山古墳』

京都大学阿武山地震観測所ホームページ





▲鎌足の墓と推定される阿武山古墳出土の、玉枕の復元品。紺、青、緑の3色の、数百個のガラス玉を一本の銀線で籠状に纏みである。奈良文化財研究所飛鳥資料館蔵



▲藤原鎌足がかぶったと推定される大織冠の復元品。紗(しゃ)や羅(ら)の布地に、金糸の刺繍をほどこしてある。奈良文化財研究所飛鳥資料館蔵

